
異世界の女神と少年とその幼馴染

紗九

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の女神と少年とその幼馴染

【Nコード】

N9847Y

【作者名】

紗九

【あらすじ】

目が覚めたら湖の畔に見知らぬ美少女と二人きり。そして自分は何故か美少年と化していた。見知らぬ美少女が幼馴染の少年だと分かり、とりあえずの現実を受け止めて歩き出す二人。そして目覚める力。ってどうか目覚めていた力。

チートな能力を手に入れた主人公とその幼馴染が異世界で生きていくお話です。

たぶんBL。になる予定ですが・・・

1 (前書き)

何となく書いてみたら続きモノだったらしい^^;

「朱里、おい！ 起きろって！」

すぐ傍らから聞こえる声は涼やかで耳に心地よい。

男勝りなその口調をもつてしても、その魅力は1？ たりとも損なわれずに頭の中に響いている。

こんな声で起こされたって全く起きる気はしない。

むしろずっと聞いていたくらいだ。

「起きろつつつてんだろがボケエ！！」

「ぶっ！？」

それはどんな口調になっても変わらなかったが、顔面に水をかけられたとなれば話は別だ。

すぐさま起き上がって鼻やら口やらに入った水を排除する。

むせる私を見下ろしているのは、美しいプラチナブロンドを腰の辺りまで伸ばした美少女だった。

宝石のような見事なブルーの瞳は怒りに満ちており、寝ている人間の顔に水をかけるといふ悪魔の所業をやったのけた犯人は彼女だと分かる。

それでも、こちらが怒る気にならないくらい彼女は美しかった。

同性の私から見てもそうなのだから、異性など彼女に触れることすらはばかられるのではないだろうか。

「お前朱里だよな」

「え？ 何で知って、るんですか？」

思わず遣い慣れない敬語が出てしまう程美しい。

とにかく美しいとしか言いようがない少女は、突然私の首根っこをつかむと引きずって傍らの湖に顔を押し付けた。

いじめられているかの様だが抵抗する気も起きない。

だって本当に・・・

「なっ・・・！？」

水面手前で停止させられた私が見たのは水面に反射する自分の顔。ただし、今の今まで筆舌に尽くしがたいほどの美しさだと褒めたえ続けた彼の美少女そっくりの顔だった。

多少丸みがない所を見ると男のようだ。

一番の違いは髪の色だが。

光り輝く銀色の髪が美しい少女とは違い、顔の横から流れてくる髪は今までの髪色と同じく烏の羽のような黒だった。

烏だなんて水面に映る彼に対して失礼極まりないが、とにかく違う。

首から手を放してくれていた美少女を見上げれば、美少女の目には涙がたまっていた。

つられて私の目にも涙がたまる。

「オレだ。アキラだよ」

「な、んで・・・私たち」

何が起きたのかはさっぱり分からなかったが、とにかく今の状態は夢ではなかった。

泣いて泣いて、泣き疲れて眠っても、翌朝目が覚めたのは同じ湖の畔だったのだから。

1（後書き）

どれだけ続くかは未定ですが、何となく終わりは決めてるので最後まで書けるようがんばります。

幼馴染と言っても、赤ちゃんの頃から兄弟の様に育ったとかいうわけではない。

ただ近所に住んでいて、幼い頃は確かによく一緒になって遊んだが、それもせいぜい中学生まで。

高校に上がり学校が分かれてからは、会えば笑って話すが、積極的に休日を共に過ごすような友人ではなくなっていた。

そんな幼馴染の部屋に上がったのは三年ぶりくらいだったろうか。そうして気づいた時にはここに居た。

見たことが無いほど自然な自然。

清らかな水をたたえる湖。

草木も花ものびのびとしていて空気がきれいだった。

「はは、体中いてえな」

「アキラ目腫れてる」

こんな地面で直接眠ってしまえばそうなるに決まっていた。

泣いたまま、顔も洗わなかったアキラの顔もひどかったが、私も同じようなものだった。

顔を洗おうと覗き込んだ水面にはそんな顔の美少年が映りこんでいた。

「・・・とりあえず歩くか」

「そうだね」

湖の周りを囲んでいるのは多くの木々。

森の中の湖と言ったところだろう。

その湖につながる道は二本あった。

私たちは、二本の内自分たちに近い方の道を歩き出した。

どちらでもよかったのだ。

目的なんて生きることだけしかないのだから。

どれだけ歩いたのか、太陽が真上に来た頃に、森の空気が一変し

た。

「アキラ！」

「どうした！？」

小柄になってしまったアキラを肩に軽々担ぎ上げて走り出す。
嫌な視線を感じた。

こうしなければいけないと思ったのだ。

「シユリ！ 後ろ！」

「分かってる」

強盗かもしれない。

先回りされているかとも思ったが、それでも走った結果、その先
回りさえかわすことができた。

逃げ切れるかと思ったとき、背後から聞こえてきたのは馬の蹄の
音だった。

「なっ！ なんなんだよ！」

どこの牧場から逃げてきたのかと思うような生き物だが、その上
には人が乗っていた。

「待ちなさい！ 君、もう大丈夫だから！」

前に回りこまれ、森の中に逃げ込もうとしたところ、黒馬に乗っ
ているのが先ほどの連中とは違うことに気が付いた。

「シユリ、逃げなくていいのかよ」

「・・・この人は大丈夫」

この状況で受け入れるのは残念だが、やはり私たちの現状はおか
しい。

私たちの容姿についてもそうだが、目の前の男性もそう。

アキラと同じプラチナブロンドに、薄紫の水晶のような瞳。

神様が手ずから作り出した芸術品のような造形だということも
アキラと同じだ。

「怪我はないか？」

男になった私よりも背が高くてかっこいい。

王子様のような人だ。

少し頼りなさそうなところがむしろいい。

なんて考えはおくびにも出さず、女になったアキラを背後にかばいながら青年に対峙する。

「驚かせてすまない。部下がそちらの御嬢さんを探し人と間違えたようで」

私に対して話している青年は、馬を下りると申し訳なさそうに膝をついて私の手を取った。

「こんなか弱い女性を追い回すなんて、申し訳ないことをした」

そして最終的にはやるんじゃないかと思ったが、人の手の甲に唇を押し付けた。

こんな風習、日本どころか外国にだって今時ないだろう。

やはりここは違うんじゃないだろうか。

「なっ、なっ・・・!!」

口づけられた本人よりも、背後に隠していたアキラの方が焦りだして訳の分からないことを口走り始めている。

「すみません、それでもオレ男なんです」

よく考えてみればそうだと思いつき、言ってみると青年は目を丸くしていた。

こちら最初驚いたが、一回尿意をもよおしてしまえばどうしようもない。

アキラにやり方なんか聞きながら、どうにかこうにかし終えたのだ。

大変だったが、あれさえ乗り越えればもう怖いものはない。

それでも私はもう男なのだから。

「・・・」

「それでは、先を急ぎますので、失礼します」

呆ける青年をそのままにして、私はアキラとその場を離れた。

「・・・何だ、今の」

「思ったんだけどさ」

人前でもないし、間違っても手なんか繋いでいないが、先ほどの

ことがあつてアキラの服の裾を放すことはできなかった。
その状態で森の中の道を進む。

「ここ、異世界ってやつじゃない？」

「パラレルワールドとかか？」

「タイムスリップよりは近そうだと思つて」

フィクションのファンタジーなお話の中の出来事でしか知らない。
現実に関わりうるなんて誰も思つちやいない。

ただどこには知らない自分が居て、知らない文化があつた。

「さっきの人もなんか王子様みたいだったし、黒いけど馬乗つてたし、剣まで持つてたし」

「・・・ああいうのが理想？」

「ここが異世界なら許すけど」

現実あの格好で現れたらもちろん引く。

それは自分たちでも同じだろうが。

やっとたどり着いた人がいるところ。

王子っぽい人と別れてからその日の内にその町に着くことができた。

「・・・」

「・・・」

思った通り、そこに車は走っていないかった。

日本人も居ない。

それでも話を通じるのだから不思議ではある。

ヨーロッパの田舎町、という感じ。

建物は立派だし、村とは言えないだろうと思う。

町の中に川があつて、女性たちがそこで洗濯物を洗っていたりもする。

町の入口には立派なアーチが設えてあり、町中の道路は馬でも馬車でもものともしない石畳で舗装されている。

そういうテーマパークがあつてもここまで細かく再現は出来ないはずだということまでリアルだった。

町の中を歩いてしまえば、アキラも納得せざるを得ない。

「困ったな」

「どうする？お金も何もないんだけど」

身に着けている物なんて自分たちの服だけで、装飾品一つ身に着けていない。

「モンスターでも倒せばお金稼いだりできるのかな？」

「ゲームじゃねえんだからんなことできるかよ」

アキラはそう言うが、私はそうでもない。

「たぶんできる。なんか私、ゲームで言うところのLV・MAXな気がするんだよねえ」

「何だそりゃ？」

「『グランドグラン』」

何を言っても理解はしてもらえないだろう。
そう思い、実際に手の中に魔法を出した。

「・・・何だよソレ」

「グランドグランっていう魔道書、らしいよ？」

私にだって分からないことはある。

出てきた魔道書は古めかしいが高そうな装丁の本だった。

そしてそれは手の支えもなく宙に浮いている。

「何か、最初からこの世界の知識がある程度頭の中にあるような気がするんだよねえ」

「オレにはねえ」

アキラはそう言うが、そんなことはないだろう。

「じゃああの看板、読める？」

目の前の建物の入口に掲げられた看板を指さす。

「ホーミイの宿屋」

普通に読んでくれてしまった。

それが何だよって顔で見上げてくる顔がまた可愛い。

「うん、じゃあ何語で書いてあると思う？」

「!？」

そこでやっと気が付いたらしい。

無意識に読み上げた文字はひらがなでもカタカナでも漢字でもない。
い。

もつと言えば英語でも中国語でもフランス語でもスペイン語でも・

・とにかく地球上の国で使われてきた文字ではない。

「何だありゃ・・・」

「この国の文字だろうね。ちなみにこの本は古代語で書かれてるらしいから、アキラ読める？」

「読めん・・・」

本の適当なページを開いて見せるがアキラには読めなかった。
そうなんじゃないかと思った。

「私とアキラの中の情報量が違うみたいだねえ」

「なんでお前魔法なんていきなり使えるんだよ」

「それだけじゃなくってさ、コレ、かなり高位の魔道書らしいし、たぶん剣も使える」

「だから何でだよ」

「わかんないよ。頭の中が勝手にそう言うんだから」

魔道書の目的のページを開く。

そして知っているやり方で本に魔力を込める。

すると本の中から剣の柄が生えた。

それを掴んで本から抜き取る。

「さっきやろうかと思ったんだけどさ、いきなり思いついたから混乱して逃げちゃった」

この召喚っぽい魔法は、魔道書を極めると使える必殺技みたいなモノらしい。

「な、なんでお前だけなんだよ!!」

「いいじゃん。これからちゃんと教えてあげるし」

「お前だけ最初からマスタークラスってひでえ!!」

そう言われてもなりたくなったわけじゃないのだが。

「これで、ますます私は男に近づいて、アキラは女に近づいたんだね・・・」

「う・・・」

そんな力を手に入れた中で、私たちは割と簡単にこの世界を受け入れた。

そうなるように頭の中の情報が書き換えられていたのかも知れないが。

3 (後書き)

ご都合主義どんと来い！なお話です。そして説明^^；
さらにはBLと言っておいてそれっぽい要素がない・・・

魔法と剣以外にも、私にできてアキラにできないことは山ほどあった。

まず今までお世話になってこなかったスキルはほとんどがそうだ。料理に乗馬に狩猟に野宿に、あとは飲酒。

この世界では飲酒に年齢制限はなかった。

そのため、私もアキラもアルコールに興味津々。

しかし、この容姿で二人して酔っぱらったらこの世界ではどうなることが予想がつかないわけでもない。

私は控えるようにしていたのだが、アキラはアルコール度数の低いブランドーの水割りのような酒でもグラス一杯で酔っぱらう。

対する私は、アキラの目を盗んで一人で飲みに出て試してみたが、底がなかった。

その上翌日に何も残さない。

正にワクだった。

「・・・なんかシュリに世話かけっぱなしだな」

「いいよそんなこと。何かできちゃっただけだし」

そう言って野宿するたき火を囲い、保存食の干し肉や固いパンをかじる。

「それに、私人と話すの未だに慣れないから、アキラが色々交渉してくれて助かってるよ」

アキラにできて私にできないこともある。

それが今言った話だ。

「自慢になんねえよ・・・」

未だに一人称をオレと僕のどちらにするべきか迷っている私なのだが、アキラは既に女性らしい立ち居振る舞いをマスターしていた。今や人前に出ればどこから見ても美少女だ。

話し方だけではない。

食べ方や歩き方、話し方に笑い方までもがとにかくかわいいらしい。二人きりの時に聞くガサツな男口調の方が違和感があるのは最初からだが、アキラが可愛らしく笑えば、微笑みかけられた人と一緒に見とれるくらいに馴染んでいる。

「私は何も努力してないし。がんばらないとねえ」

「お前はソレ以上すぐくんなよ」

「アキラもこれ以上女の子らしくなると困るよ」

本人だってやりたくてやっていることではない。

だから嫌そうな顔をした。

「ほっとけ」

「こないだだって双子に見えないって言われちゃったしねえ」

髪の色の違いだけで、歳にも差があるようには見えなかったため、私たちは双子という設定で旅をしている。

「それはお前がでけえからだろ」

「そうかな？アキラがかわいすぎるからだと思うけど」

男女なのだから身長に差ができるのは当たり前だ。

アキラの女の子らしさのせいで、私以上に可愛さが際立ってしまったっているせいだと思うのだが。

しかし、今まで出会ってきた人々には双子だと名乗ってしまった手前、今更変えることはできない。

中には同じ旅人も居たし、この兄妹のことはそう簡単には忘れられないはずだから。

「そろそろ王都だねえ」

最初の町でそろえた荷物の中から地図を取り出し、たき火の横に開いて見せた。

「今日は・・・ここら辺だろ」

「そうだねえ」

ここから東に見える川を渡れば後は王都まで一直線だ。

ただし、渡ってから馬で半日以上の行程を経て、という話だが。そもそも私たちが王都に向かうことに理由はない。

見てみたい、というのが一番の理由かも知れない。

この世界で生きることを決めた私たちは、生きる場所を求めている。

職と住む場所を探している。

その中で王都に寄ることだけは決めている、という話だ。

王都観光が終われば、再び永住の地を求めてさすらう。

まあ、王都がいい場所だと思えばそこで永住するつもりはあるのだが。

「アキラって何かやりたい仕事あるの？」

「さあ・・・シユリは？」

「わかんない。仕事内容より職場環境、かなあ」

やりたいことはないが、働きやすい場所がいい。
その方がきつと楽しいに決まっているのだから。

川を渡る所を襲われたらしい。

昨夜の内から目的地にたどり着くためには渡らなければならない川があることは分かっていた。

その場所も決めていた。

川幅が細くて浅い場所だ。

しかし、目前の一団はそこで襲われていた。

「アキラ、しっかりつかまってよ」

「分かってる」

これから自分たちがその場所を通るといところだ。見ないフリはできない。

「『グランドグラン』」

左手で手綱とアキラを支え、右手に魔道書を出現させた。

馬で川岸まで近づいて、見下ろす形で確認する。

その間に既に目的のページは開いておいた。

「九本の光の矢『シャイニーアロー』」

本を頭上に掲げ、詠唱と共に振りおろした。

ホーミングの付いた光の矢は狙い通りに九人の体を貫いた。

九人がかりで襲っていたのはたったの三人。

「君たちは」

助けてから気が付いた、川の中で馬から落ちていたのはいつかの気障な青年だった。

あのときは気が付かなかったが、あの作法はこの世界でも一般的ではなかったのだった。

「お久しぶりです」

川まで下りて襲われていた三人の元まで近づいた。

「怪我はありませんか？」

「ああ・・・君たちは魔道師だったのか」

否定はしないが肯定もできない。

アキラは自ら馬を降りて川に倒れた彼の黒馬を看ている。

「『ラーナーリン』」

アキラに買い与えた魔道書は初級の回復術の魔道書だ。

馬に回復術を施したアキラがこちらに戻ってきたので引き上げようとしたら、青年がアキラを抱き上げて私の前に乗せてくれた。

「二度も助けられたな。本当にありがとう」

「いえ、お怪我がないなら良かったです」

今の魔法で怪我なんて負わせたなら元も子もない。

「そちらの方は・・・」

「先日コークスの南の森で少女二人を追ひ回したことがあったろう」

「まさかそのお二人が・・・」

そのはずなのだが、あの時はもつと人数が居たはずだ。

「先日は失礼した。今回の事も含めて礼がしたいのだが、名を教えるてはもらえないだろうか？」

どうやら青年は偉い人らしかった。

年上らしい従者が居ることから、貴族か何かだろう。

ここで名乗らないのもおかしいし、名乗って困ることもない。

「私はシュリ、こちらは双子の妹のアキラです」

「私はファルキオ・F・シルヴァンティアだ」

そうですかあ、なんて相槌を打ちかけたが、腕の中のアキラの様子がおかしい。

焦ったようにこちらを見上げて挙動不審に青年と私を交互に見つめている。

「こ、この人・・・」

「え？」

「殿下！？ご無事ですか！？」

王都のある方角から現れたのは馬ではない謎の生き物に乗った、これもまた目の保養になる美青年だった。

足もとに雲を纏った馬と竜のキメラみたいな生き物から飛び降り

ると、濡れるのも厭わずに青年の足元にひざまずく。

元から居た二人も彼に倣い頭をたれる。

あんまりな光景にどうしたらいいのか分からなかったが、アキラが衝撃的なことを言ってくれた。

「王子様だ、この人」

それっぽいなあ、とは思っていたが、それが真実だと聞かされるとクラツときた。

「危ない！」

それを律儀に支えてくれちゃう王子様。

アップで見ても綺麗な顔だった。

生き物じゃないみたい。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫です・・・」

この世界に来て2日目で既に王子と遭遇していたということだ。

しかも今回はそんな王子の命を救ってしまったような気がする。

「そちらの方々は？」

「私の命の恩人だ。礼を尽くしてもてなしてくれ」

そんなこと頼んでないのに。

「かしこまりました」

そう言った青年の目がこちらに向いたが、その目に感情らしいものはなかった。

案内されたのは予想通りの場所だった。

さすが王子だというだけあり、通されたのは城の一室。

「なんかとんでもない場所に來たな・・・」

「やだなあ。バレなきゃいいけど」

中身と容姿が一致しないというのは裏表が激しいと同義だろうか。
どのみち正常だとは思われないだろう。

アキラの女のフリはそんな心配を必要としないクオリティに達しているのだが、問題はやはり自分のことだ。

「お前、オレと話してる時も素になるの止めろ」

「そんな露骨に女言葉使つてないと思うけどなあ」

「せめて一人称は“オレ”にしろ。決定な」

そう言われただけで実行可能なわけではない。

今までだって努力してきたのだから。

そこにきて突然のノックに、素で話していたアキラが飛び上がる程驚いていた。

「はい」

「失礼致します」

ドアを開けて丁寧にお辞儀をしたのは、先ほど川まで王子様を出迎えに來た青年だった。

王子の騎士だという割に鎧を着ているわけでもない彼はライナーさんというそうだ。

彼の夕焼け空のような朱色の髪は、この世界でも今まで目にすることが無い程美しい。

その髪色に目を奪われていた私を、顔を上げたライナーさんの翠の瞳が鋭く射抜く。

「シュリ殿、でしたね」

「あ、はい」

彼は明らかに私だけに敵意を向けている。

訳が分からずアキラの方を見るが、女の子らしく首をかしげるだけだった。

「何が目的ですか？」

二度も王子に近づいたのは確かに不自然だろう。

それが分かっていながら、何故彼らは私たちを城へ招いたのか。というか、どうしてアキラにはその敵意を向けないのだ。

はつきりと、窓辺に立つアキラからは視線を外し、ソファから立ち上がった私を睨みつけているのはそういうことだろう。

「別に王子とお近づきになろうとしたわけでは・・・」

「二度も王子に接触しておいて、そんなはずがないでしょう」

「では、ライナー様はわたくし達があのまま見て見ぬフリをしている方が良かったというのですか？」

若干うすら寒い言い回しだが、さすがアキラだ。

私にはできない。

「アキラ殿は知らずとも、あなたには目的があったのでしょうか？」

「なんでオレだけ・・・」

そこまで疑われる理由が分からず、力なく呟いた言葉にライナーさんの目が点になる。

「・・・オレ？」

「？」

ライナーさんが驚いているのは分かった。

今まで威圧感たつぷりに睨まれていた目が逸らされ、何故かそのようなにアキラを見ている。

「・・・シユリはわたくしの双子の兄ですが」

そう言われてからやっと理解できた。

ライナーさんは私のことを女だと思っていたのだ。

そして、先ほどまでの話の流れから推測するに――

「もしかして、オレが王子様を誘惑しようとしてると思ったとか・・・？」

「っ！？ですが、実際に王子はあなたのことばかり・・・」

しかし、王子様は私が男だということを知っているはずなのだが。
「殿下は同性がお好きとか・・・」

「そ、そんなはずは・・・」

アキラの言葉にライナーさんも否定しきれずに項垂れてしまった。

「本当に、男性なのですか？」

「女つばいと言われることはありますが、そんなに間違えられたことはないんですけど・・・」

ここまで旅する間にも、からかわれて御嬢さん扱いされたことはあるが、真剣に女扱いしてきたのは王子様とライナーさんの二人だけだ。

「普通に男です」

「よね・・・」

豪華な内装の客室に通され、立派な身なりをした青年に深く謝罪されるような、どうしてこんなことになったのか。

ライナーはひたすら謝罪の言葉を口にし、王子の異常な性癖疑惑について何故かアキラと二人で慰めの言葉をかけた。

「きつと兄に命を救われ、憧れていらっしやるだけなのではぐざい
ませんか？」

こうして会話を聞いていると、彼女は本当にアキラなのかと思わずにいられない。

どこでそんな言葉遣いを覚えて来たのやら。

「そうだといいのですが・・・」

「そうですよ。だって・・・」

私だって慰めている場合ではないのだ。

確かにあんな美形に好意を持たれるのは喜ばしいことだ。

それが例えこの容姿のためだとしても。

しかし、私、いや今はオレなのだ。

オレが男に好かれて喜ぶのは、王子がオレを好きだということと同じ位おかしいだろう。

そう考えると、オレはライナーさんに何も言えなかった。

「そうと決まったわけでもないのですから」

オレとライナーさんの落ち込みぶりを見て、アキラは呆れたようにため息をついた。

その姿さえ美しく愛らしい。

ライナーさんもそう思っているに違いない。

だからアキラは誰からも疑われないのかも知れなかった。

「はぁ・・・申し訳ないのですが、この後陛下が直々に礼を述べた
いとのことでして、謁見の間までご案内させていただけますか？」

哀れなライナーさんのためというわけではない。

国王直々にそう言うのであれば、行くしかないではないか。

この国のこともろくに知らない身ではあるが、王の意味は分かっている。

「失礼がないといいんですが・・・」

「ファルキオ王子もいらっしゃいますので大丈夫ですよ。たぶん」
オレたちに感情を曝け出してくれるようになった代わりに、王子を信頼できなくなったライナーさんがそこに居た。

銀色の髪に紫の瞳は王子との血の繋がりを感じさせる。しかし、その色彩以外は特に似ているとは思わない。

そんな顔の女性だった。

美人な王子の母親というにはあまりに違い過ぎている。

「どうか父親なんじゃないかと思った。

「アリーシャ・R・シルヴァンティアだ」

凛々しい。

かつこいい。

女王だとアキラが教えてくれていなければ、決して気が付くことはなかっただろう。

オレと女王どちらが女性らしいかと問われれば、間違いなくオレだ。

彼女が女性ならば、オレが女性でないはずがない。

王子とライナーさん、ほか国の兵たちがオレを女性と勘違いした理由が女王なのかも知れないと思う程、彼女は男性的だった。

微笑みを浮かべる女王だが、その目つきは元来鋭く厳しいものと推察できる。

だからこそ、その笑顔がまぶしいのだ。

まあ、二人が入室するときにちらつと見ただけなんだけれど。

顔を上げていいのかも分からずライナーさんに言われた通り、跪いて頭を垂れていた。

「二人とも、顔を上げてくれないか？」

「キオから聞いている。愚息が大変迷惑をかけたようで申し訳ない」
似ていないと思ったが、並んでいるのを見ると親子だな、と思った。

笑顔、というか笑い方がそっくりだった。

思ったよりも謁見の間というのは広いのだが、玉座まで続く赤い

絨毯の上でもかなり近くまで連れて行かれた。

先導してくれたのがライナーさんなので、この位置で失礼ではないのだろうが、近すぎるのではないかと思う。

「いえ、偶然通りかかっただけでしたし・・・」

「それでも、二人が居なければオレの生はあそこで終わっていたかも知れない」

すぐにライナーさんが来たから、間に合っていたんじゃないかと思わないでもないが、助けに入ったことは確かなので否定もできない。

「というか、女王陛下相手に何度も口をきこうとは思えない。

何か間違ったことを言えば殺されたりしそうで怖い。

「コークスの森でも驚かせてしまったし」

「何？二度も世話をかけたのか？」

女王が王子を睨んでいるがそんなことは気にもならないようで、こちらを見下ろす王子の顔は笑っていた。

「探索の兵がアキラ殿を口ザリと間違え、シュリ殿がそのかどわかし犯人だと思い込んで襲いかかったのです」

「なんでそれを先に言わんか！？」

普通の母親らしく、息子を叱りつけると頭をはたいていた。

それにはさすがの王子も頭を押さえ顔を顰めていたが。

「すまなかった。我が国の兵が貴殿らに危害を加えておったとは」

「少し追いかけられただけです。その際にはわたくしどもの方が王子にお助けいただきました」

「オレは君たちを追いかけて誤解を解いただけだよ。君たちなら、簡単に逃げられたらう？」

あの時はまだ魔法を使っていなかったたので簡単ではなかったかも知れないが、逃げることは可能だったろう。

王子が追って来なければそうなっていたはずだ。

「そうと分かれば余計に何か礼をせねばなるまい」

「そのお言葉で十分でございます」

最早口をきくのは全てアキラに任せ、オレは女王の容姿を失礼にならない程度に見ていた。

が、しかし。

その視界の中で、王子がじつとこちらを見ているのだ。

微笑みをたたえた貴公子の顔で、誰の目にも美しく賢い少女であるアキラではなく、先程から女王とアキラの会話を聞いているだけのオレを。

いきなり女王から視線を逸らすのも不自然かと思い、王子の視線には気づかないふりをして、今は女王の靴の飾りを興味深げに見ているフリをしている。

あの視線が気になって、ただ眺めているだけになっているのだが。女性だった時にこんな風に熱のこもった視線を向けられたことがないので何とも言えないが、とても同性に向ける目ではない気がする。

振り返ってライナーさんに助けをもとめたいが、女王の手前それが許されるのかも分からないのでただひたすらに気づかないふりを続けていた。

「そうだ。二人は魔導師だったな。魔道書を用意させよう」

アキラでも辞退しきれなかった礼の品は魔道書2冊。

第7章『フィオレスト』と第8章『グレスガイア』。

「本当にもらっていいんでしょうか？」

「国王からのご好意ですから。それに、市場にはほとんど出回らない貴重品ですし」

それは知っていた。

第6章以降は国のお抱え魔導師に回り、市場にはほとんど下りてこないのが現状だ。

「ペンをご用意いたしますね」

「ありがとうございます」

魔道書には署名して所有の証をたてなければならない。

質素なメイド服の女性がペンとインクを用意してくれたが、2冊

ともアキラに渡した。

「国王は多分お二人に1冊ずつのおつもりでお渡ししたと思うのですが・・・」

「ですよね。でもオレ、2冊とも持つてるんです・・・」

「・・・」

ライナーさんには呆れられたが、そんなこと女王の前で言えるわけがない。

「いえ、でも本当にありがたいので、陛下には言わないでくださいね」

「そりや言いませんけど・・・こんなものよく持つてましたね」

ライナーさんも魔導師だ。

王子の騎士だという話だが、オレが想像しているような剣と鎧とお馬さんの騎士ではなく、魔法で王子を守っていらっしやるらしい。

「ええ、まあ」

「わたくしはまだ第1章しか持つておりませんし、とても嬉しいです」

心底嬉しそうなアキラに、ライナーさんはつられて笑っていた。

魔法が使えるようになったアキラは、この世界に来てから本当に喜んでいた。

使える魔法が増えるのは、更に嬉しいことだろう。

「そういえば、お二人はどのような理由で王都へ？」

今まで聞かれなかったから答えなかったが、旅人の旅の理由というのは意外と聞かれないものなのかも知れない。

理由なんてないのが普通らしい。

アキラはとても旅に向いているようには見えないだろうから、気になるんじゃないかと思ったのに、実際尋ねられることはあまりないのだ。

「どこか定住できるところを探しております。要するに家と職探しです」

「こちらでもお探しいたしますが？」

「いえ、自分たちで見て決めたいんです。それにお礼はもういただきましたし、そこまでしていただくと、なんだかそのために王子様を助けたみたいじゃないですか？」

ライナーさんと話すことに慣れてきてしまったオレは、ついうっかり言わなくてもいいことを言ってしまった。

これでは押し付けがましいと言ったようなものだ。

言ってから口をふさぐと、ライナーさんは嫌な顔もせずに笑ってくれたのでよかったが。

「すみません。今の絶対陛下たちに言わないでくださいね」
「分かってますよ」

最初の印象に比べると、ライナーさんはかなり優しい人らしい。というか、今まで会った人の中で一番話しやすい。

今は同性だが精神的には異性だし、本来ならば苦手な顔がいい人だ。

王子程きらびやかな美形ではないが、ライナーさんも洋画にだって出てこないような美形男子だ。

「シユリは思ったことをすぐに口に出し過ぎですわ」

アキラに向ける笑顔も爽やかでかっこいい。

アキラに向けてる笑顔の話だ。

オレとアキラは別々の部屋を与えられている。

と、言っても隣の部屋なので用があればすぐに会いに行くことができる。

ライナーさんとアキラを見送り、やたらと豪華な部屋に改めて居心地の悪さを感じた。

そういえば、一人きりになれたのは久しぶりだ。

今までは片時も離れずアキラが傍に居た。

しかし、この部屋で一人きりにされるのは心細い。

家具に傷をつけても困るので必要最低限、風呂に入って寝てしまおうかと考えたが、後でライナーさんと食事をとる約束をしてしまったことも思い出した。

今まで暇だと思うこともなかったので、暇つぶしになるようなものは持ち歩いていない。

出歩いて不審者扱いされても嫌だし、でもダメだとは言われなかったなあ、なんて考えていたらドアにノックがかかった。

「ファルキオだ」

その言葉に驚きより先に気まずさを覚えたが、王子様を締め出すわけにもいかないと思いドアを開けた。

どうぞ、というよりは安全だろうと思ったのだ。

「どうかされましたか？」

ドアの外には本当に王子様が居た。

「よければ城内を案内させてもらえないだろうか？」

美形だが、その優しさがにじみ出ているかのような雰囲気を持ち主である。

というか、王子様という割には威厳に欠ける。

その王子様の向こうにはライナーさんとアキラが居た。
断れる雰囲気ではない。

「怒ってますか？」

庭の池を覗き込むアキラに王子様が何やら蘊蓄を披露している。それをぼーっと眺めていたら、ライナーさんに恐る恐るというカ
ンジで声をかけられた。

「いえ、特に疲れているわけでもないのでもいいんですけれど・・・」
「すみません。殿下がどうしてもシュリ殿にお会いしたいと言われ
て」

だから何でオレなのか。

同じ顔何だからアキラでいいだろうに。

顔じゃなくてもせめて性別を気にして欲しい。

「オレ、城で働く気はありませんよ？」

「分かりますか？陛下もアキラ殿のことをかなり気に入られたよう
で、ぜひ自分付の侍女にと申されているんですが・・・」

「アキラには断られたでしょ？」

「はい」

こんな堅苦しい生活、やっていられるわけがない。

「ギルドに所属して、魔導師として普通に暮らしていけたらと思っ
てます」

人より優れているところなんて、魔導師としての力とこの顔だけ
だ。

「ですよ。私も殿下の騎士という仕事が最近本当に・・・」

「こんなところで言ったら、王子様に聞こえますよ」

というか、王子様がこちらを見ているのだ。

アキラと話している間もずっとこちらの様子をうかがっていた。

「二人は何処の出身なんだ？」

「えっと・・・」

「分からないのです。生まれた時から両親ではない方々と旅をして
おりました」

出身を問われることは想定していなかった。

尋ねられたのも初めてのことで、考えてもいなかったのだ。

それをアキラは口から出まかせでよくしゃべってくれた。

「シユリの魔法の師にあたる方々なのですが、三年前事故で・・・」

黒いダックスフンドに似た雑種だった。

ポチのことを思い出したのか、アキラは綺麗な涙を流した。

もちろんそうしようと思ってそうしているのだろうか。

愛犬のことで涙を流すアキラはとても綺麗で、さすがの王子様もこのときばかりはアキラの姿に胸をうたれているようだった。

それにしても嘘泣きなんていつの間に身に着けたのか。

「すまない。そうとは知らず・・・」

「いえ。気にしておりません。命ある者はいずれ死にゆくのが定めです」

それは七年前におじいちゃんが亡くなった時にウチのおばあちゃんが言っていた言葉だ。

なんかそれを聞いたらこっちまで泣けてきた。

おばあちゃんは元気だろうか。

「・・・そろそろ戻りますね。アキラ、行こう」

さめざめとした空気だったが、部屋に戻ってからアキラと笑ってしまった。

別に真剣に聞いてくれた王子様とライナーさんを笑ったわけではないのだ。

泣いてしまった自分たちを笑ったのだ。

この世界に来て何日目かはもう分からないが、今になってあの世界が恋しくなったようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9847y/>

異世界の女神と少年とその幼馴染

2011年12月5日19時52分発行